



「墮落論」

坂口 安吾著

買った当初はあまり面白くなかったので読めなかったものを、十数年ぶりに読み進めることができました。表題の作品よりも、この中に収録されている「不良少年とキリスト」を読んで感じたことです。著者は歯痛に悩まされた為八つ当たりで書いているようにも思えますが、自ら命を絶った太宰治に対しての悔しい気持ちを表した作品だと思いました。

三ヶ月前まで歯痛に苦しんでいた私は著者に共感しながらページを繰りました。歯痛の収まった著者の元に太宰治の訃報が届き、太宰と親交の深かった彼は記者達に取材されるのを嫌って姿を隠します。そのせいで記者からは太宰の自殺は狂言であったのではとか、実は彼が太宰を匿^{かくま}っているのではと思われま^す。著者は『そんなイタズラができるくらいなら太宰の作品はもつと傑^{すぐ}れた物になっている』と太宰の作品や生前の言動に対する分析を始めます。その内容は「この人は太宰治が嫌いだっただのか？」と錯覚してしまう程。けれども読んでゆく内に生きること放棄した太宰治に対する憤りが伝わってきま^した。私も身近な人が若くして亡くなったというのを聞くと、悲しいといより「死ぬにはまだ早いやる!」と思ってしまう。著者は『言つは易く、疲れるけど、度胸は決めて生き抜く』と書いているのに自分は四十九歳で病没します。ここまで書いたのなら、頑張^つて長生きしてほしいかったです。もったいない気がしました。



野原

集英社文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞